

刈り入れを待つ霊の畑

ヨハネ福音書4:31-38
【新改訳2017】

- 4:31 その間、弟子たちはイエスに「先生、食事をしてください」と勧めていた。
 4:32 ところが、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたが知らない食べ物があります。」
 4:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれかが食べる物を持って来たのだろうか。」
 4:34 イエスは彼らに言われた。「わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです。」
 4:35 あなたがたは、『まだ四か月あって、それから刈り入れだ』と言ってはいませんか。しかし、あなたがたに言います。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。
 4:36 すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに至る実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。
 4:37 ですから、『一人が種を蒔き、ほかの者が刈り入れる』ということばはまことです。
 4:38 わたしはあなたがたを、自分たちが労苦したのでないものを刈り入れるために遣わしました。ほかの者たちが労苦し、あなたがたがその労苦の実にあずかっているのです。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 「弟子たちの知らない主の食べ物」とはどういう食べ物ですか。何のことですか。
- (2) 「永遠のいのちに至る実を集める」ためにはどのような手順が必要ですか。
- (3) たった一人の働きで救われた、という魂はほとんどいない。その事実から、働き人は自己を過大評価しないようにしなければならないことを説明してください。

【解説】

(1) 弟子たちの知らない食べ物

主イエスがサマリアの女と話しているところへ、食べ物を買いに町へ行っていた弟子たちが帰って来ると、彼女は、人々にキリストを証しするために町へ行ってしまった。

そこで、弟子たちは自分たちが買って来た食べ物を主イエスに差し出した。すると、主は弟子たちに言われた。

《わたしには、あなたがたが知らない食べ物があります》(32節)

この節のイエスのことばには、比喩的な意味が込められている。主は弟子たちの知らない霊的な力の源、魂の栄養を得ておられた。神を知らない人々を救いに導くことに新たな意欲を燃やし、そのためしばらくの間、自分の空腹させ忘れておられた。弟子たちは主のことばを肉的な意味にしか解せなかった。だから、弟子たちはこう言った。

《だれかが食べる物を持って来たのだろうか》(33節)

主は、自然の事柄に端を発して、霊的な事柄へと進んでいき、霊的真理を教えられる。これが主の人々を教える教え方のパターンである。ニコデモの場合も、サマリアの女の場合もそうであった。ここにおける弟子たちとの場合も同じである。主はこう言われた。

《わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです》(34節)

これが、主イエスの生活を律している根本原則であった。主がどのような原理で生きておられたのかということが、ここにいかんなく表明されている。

(2) 神の御心を果たす使命感

主イエスの活力源になっていたものは、「神の御心」であった。「神の御心」とは、この地上で果たさなければならぬ救い主としての使命を果たすことである。このように「わたしを遣わされた方」と主イエスが言うように、「自分は神から使命をもって遣わされている」という意識が重要である。

これがはっきりしている人は、「自分の生活なのだから自分の好きなように生きる」といったような考え方は出て来ない。この使命感は、私たちキリスト者にとって、極めて重要である。

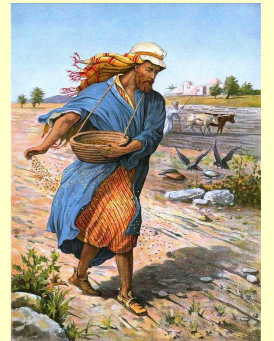
主イエスは、それをすることが、「わたしの食べ物」と言うおられる。「食べ物」とは、それによって人々が養い育てられるものという意味で、その人の活力源である。

と同時に、それは楽しみであり、また喜びをも意味する。主イエス・キリストは、父なる神の御心を、ただ齒を

食いしばって行っているのではなく、どちらかと言うと、楽しみながら行っておられた。これが長続きし、実を結び働き秘訣である。

(3) 「種蒔き」と「刈り入れ」の働き

あなたがたは、『まだ四か月あって、それから刈り入れだ』と言ってはいませんか。しかし、あなたがたに言います。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに至る実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。ですから、『一人が種を蒔き、ほかの者が刈り入れる』ということばはまことです。わたしはあなたがたを、自分たちが労苦したのでないものを刈り入れるために遣わしました。ほかの者たちが労苦し、あなたがたがその労苦の実にあずかっているのです。



(35-38節)

種を蒔く人

主はここでも、「刈り入れ」という目に見える出来事を霊的な教えに適用しておられる。主がこのような話しておられた時、サマリアの女に先導されて、スカルの町の人々が大勢こちらにやって来ていたのかもしれない。

弟子たちが御言葉の種を蒔いたのではない。蒔いたのはサマリアの女である。しかし、今や弟子たちは刈り入れることができる。

収穫はまだ先の話だ、と弟子たちは考えてはならなかった。畑がすでに「色づいて、刈り入れるばかりになって」いることに気がつかなければならなかった。「刈り入れ」という大きな仕事に、ただちに、精力的に取り組まなければならない、と主は彼らに語っておられた。

主は、弟子たちが召された働きに関して指示をしておられる。彼らは、主が刈り手として選ばれた者たちである。

36節の「永遠のいのちに至る実を集める」とは、その働きの実が永遠まで残る、ということを見せている。

自然界においては、まず畑が種蒔きに備え、準備されなければならない。その後、畑に種が蒔かれる。そして作物が収穫される。これは霊的ないのちにおいても同様である。

何よりも最初に、福音が語られなければならない。次にそれが祈りによって水分を与えなければならない。しかし、刈り入れの 때가やって来れば、働きにあずかった者がみな《ともに喜ぶ》のである。



刈り入れをする人たち

(4) 何もかも一人でするのではない

この出来事からずっと後、初代教会において、ステパノの殉教を契機として、キリスト者たちは地方へ散らされていった。その時、サマリアの町へ行ったピリポの伝道によって、多くの人々が救われた。

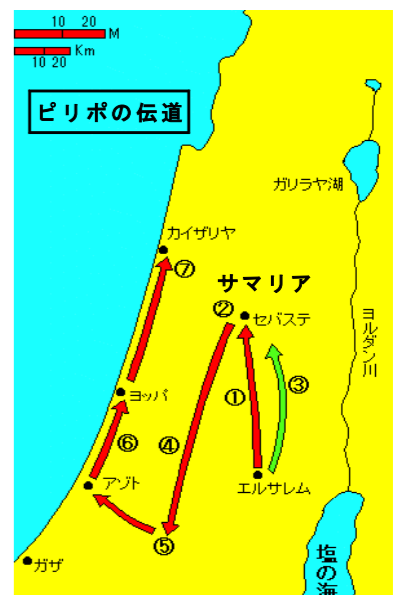
このことを知ったエルサレム教会は、ペテロとヨハネを遣わした。自分の目でサマリア人の救いを知った時、ヨハネはその昔、主がここへ来て、サマリアの女に御言葉を語られたことと、その時自分たちに語られた主の御言葉を思い出したに違いない。

主ご自身もサマリアで種を蒔き、刈り手が収穫するばかりというところまで準備された。今度は弟子たちが刈り入れを待つ畑に足を踏み入れようとしていた。

多くの魂がキリストに立ち返るのを見る、という喜びを弟子たちは経験するが、実は他の人々が労苦し場所に入ったのだ、ということ、主は弟子たちに認識させたかったようだ。

魂の刈り入れにおいては、一人の人が「種蒔き」から「刈り入れ」までをすべてするとは限らない。私たちが伝道して、誰かが決心した場合、その多くは、すでに他の人によって御言葉の種が蒔かれていて、心の準備ができていたことがよくある。

たった一人の人の働きで救われた、という魂はほとんどいないといってよい。大半の人は、救い主を受け入れるまでに何度も福音を聞いているはずである。したがって、最終的に人をキリストへ導いた人が、あたかも自分一人で、このすばらしい働きのために神が用いられた器であるかのように、自己を過大評価してはならない。



ピリポの伝道